



これまで各地商工会議所で使用されている各地商工会議所のマークの下に、ゴシック体でデザインしたシンプルで馴染め易いロゴマークになっています。ロゴは各地商工会議所青年部の英語名 (Young Entrepreneurs Group) の頭文字をとったものですが、同時に各地商工会議所青年部の持つコンセプト、若さ・情熱・広い視野をもった経営者 (Youth Energy Generalist) を表現しています。

日本 YEG VOL.46



平成19年3月号

発行 日本商工会議所青年部
〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-2-2
日本商工会議所 中小企業振興部内
TEL 03-3283-7847 <http://yeg.jp/>

編集 広報委員会

委員長 大谷 辰夫
副委員長 吉川 隆裕・根木 克己
委員 佐藤 浩之・高橋まゆみ・小野崎久雅
加倉井 巧・原田 嘉明・野田 雅之
河合 秀明・園 昇・森 徹
野島 進吾・東江 晴都

提言書



日本商工会議所青年部(日本YEG)
平成18年度会長

國枝 恭二

政府は、2006年11月の月例経済報告で基調判断を下方修正しつつも、2002年2月に始まった今の景気拡大が、1965年から70年まで57ヶ月間続いた「いざなぎ景気」を抜いて、戦後最長になったと判断、報告しました。

しかし、この好景気は、米中の好調な経済や企業の積極的なリストラ策がその背景にあることは明らかであり、実質経済成長率を見ても、いざなぎ景気期間が年平均11.5%だったのに対し、今回の景気では2.4%にとどまるなど、経済の伸びの勢いが極めて鈍く、国民の多くは景気回復を実感するまでには至っていません。くわえて、賃金水準の切り下げや正規雇用からパートや契約社員への置き換えが進んだことで労働配分率は下降線をたどり、多くの国民の暮らしはギリギリのところにあります。政府の月例経済報告が基調判断を下方修正したのも、個人消費関連指標が弱いことに依拠しているものと思われる。

また、大企業と中小・零細企業、都市と地方、業界別に目を転じて、景気回復は一部の企業(特に製造業)、そして大都市に偏り、中小・零細企業(特にサービス業)や地方には及んでおらず、社会格差の拡大も指摘されるなど、経済全体の健全な体質改善が進んだとは言えない現状にあります。

今年度、日本商工会議所青年部(以下日本YEG)は、『地域が創る日本の未来、故郷の新しい風YEG』をスローガンに掲げ、会長所信では、「日本経済の根幹を支え、企業を育み、不安のない生活や教育を提供し、将来を担う若者を育てるのも、“地域”というコミュニティの大切な役割であり、地域経済を支える中小企業の役割である。地域が地域としてしっかり経営されてこそ、故郷が

ある日本こそ、本当に愛すべきこの国の姿であると考え」そして活動を展開してまいりました。また、このスローガンと所信は、山口会頭から日本YEGに寄せられた「健全な日本の発展は、元気な中小企業によって支えられる」とのメッセージとも合致するものであると確信いたします。

前掲を踏まえ、日本YEGは、地域の声を活動に反映させるべく春のブロック会長会議並びに秋のブロック大会開催に併せ、全国400単位商工会議所青年部会長との意見交換の場を設けました。この中で、多くの中小・零細企業が抱える課題として①中小企業の事業承継(相続)制度②金融の円滑化および信用保証制度などの改善に向けた実効性ある取り組みを期待する声が多く寄せられました。これを受け、日本YEGでは、学識経験者・国会議員・専門コンサルティング会社・所轄官庁・日商担当部署との勉強会や意見交換会を重ねながら、当該制度に関する調査・研究を進め、以下の提言を提出させていただきます。

つきましては、日本商工会議所におかれましては、当該問題に関する積極的な調査・検討・精査を実践していただき、政府並びに関係機関へ建議・陳情していただきますようお願い致します。

以下、日本YEGとしての提言を記載いたします。

提言 1

■相続税の非課税

中小企業(非上場)の後継者が事業を承継する場合、相続した自社株式に対する相続税を、非課税(売却した場合を除く)としていただくようお願いいたします。

国内の中小・零細企業は、企業数で全体の9割以上、雇用では約7割を占め、日本経済の礎であることは言うまでもありません。また、優れた技能・技術を有する中小・零細企業も多く、日本経済が継続的発展を持続するためには、中小・零細企業が健全に発展していくための環境整備が欠くべからざるファクターであると言えます。

そのような視点に立脚するとき、多くの中小・零細企業の存続を圧迫する事業承継制度の見直しは喫緊の課題と言えます。

平成17年10月、中小企業庁は「事業承継協議会」を設立し、中小企業の事業承継円滑化に向けた総合的な検討を行い、平成18年6月には、中小企業の円滑な事業承継のための手引きである「事業承継ガイドライン」を策定・公表されたことは記憶に新しいところです。また、自由民主党経済産業部会中小企業調査会でも中小企業に関する緊急決議のなかで「事業継承を円滑化するために中小企業関係税制の充実・強化を図ること」を決議しました。

日本YEGとしては、こうした国や政界の動きにも呼応しつつ、もう一段踏み込んだ現行制度の改善を強く望む立場から、日本商工会議所が標記の提言を積極的に推進していただくことを提言いたします。

提 言 2

■第三者個人連帯保証の原則撤廃

中小企業が金融機関から融資を受ける際の「第三者個人連帯保証」の原則撤廃をはじめ、中小企業金融の円滑化および信用補完制度全般の見直しと改善をしていただくようお願いいたします。

安倍首相は、所信表明の中で、内閣の重要課題として総合的な「再チャレンジ支援策」の推進を表明しました。しかし、今の日本に目を転じると、欧米諸国に比べ挑戦する人に厳しい社会構造になっています。とりわけ、経済分野の諸制度も、「経営に失敗しないことが善で、失

敗は悪である」との概念によって組み立てられたものが多く、失敗を経験として評価される欧米とは大きな開きがあります。

このことを端的に示す制度として不動産担保や保証人に依存した融資制度、とりわけ第三者個人連帯保証があります。現行制度には、債務による自殺者の数が年間で約8,000人、これに支払われる保険金が約2兆円に及ぶなど、広義で悲劇的な社会現象を生む最大の根源といった問題も内包しています。また、一方で「連帯保証制度は金融機関の能力を低下させ、経営監視のインセンティブを弱めるため長期的に倒産・自己破産を招きやすい体質を温存する」（瀬尾佳美青山学院大学助教授）と指摘する声もあります。

平成18年度に、中小企業庁から全国の保証協会に対し「第三者連帯保証」の原則撤廃の指示がなされるなど新たな動きも出ていますが、日本YEGとしては、前掲のような悲劇が繰り返されないためにも、土地担保至上主義とならぶ日本の金融の害悪ともいえる第三者個人保証を原則撤廃し、その上で、中小企業金融の円滑化に支障が出ず、かつ再チャレンジ・やり直しできる文化を醸成できるような新たな中小企業金融の信用補完制度制定・システム構築に向けて、日本商工会議所が関係機関と調査・精査・検討し、国・行政等に提言・提案していただくよう強く要望するものであります。

【解 説】

地域創造・支援特別委員会では春と秋の会長会議における会長ディスカッションを担当させていただき、全国の会長様からたいへん多くの貴重なご意見やご要望、事例紹介などを頂戴いたしました。その多くのご要望の中に以下のご意見がございました。

- 中小零細企業経営者からすると、なんといっても「事業承継問題」が大きいと思う。社会保障や年金問題も日本YEGで取り上げて、よりよい形で政策提言してほしい。
- 我々中小零細企業経営者が金融機関からお金を借りるときに、第三者の個人連帯保証人を求められる場合が現在も多くある。制度的にも、人道的にも多くの疑問を持っている。現に多くの悲劇も生まれている。ぜひこの問題を日本YEGとして取り上げ、撤廃に向けての取り組みを行っていただきたい。

これらのご要望を受けて当委員会では、「事業承継問題」と「第三者個人連帯保証問題」の2点を問題解決に

向けて取り組む課題とし、学識経験者・国会議員・専門コンサルティング会社・所轄官庁・日商担当部署との勉強会や意見交換会を重ね当該制度に関する調査・研究を進め、提言書を作成しました。

平成19年3月15日、日本商工会議所山口信夫会頭へ、日本商工会議所青年部國枝恭二会長より「政策提言文」を手渡し、日本商工会議所において、当該問題に関する積極的な調査・検討・精査を実践していただき、政府並びに関係機関へ建議・陳情していただくようお願い致しました。



1年を振り返って

平成18年度は地域で頑張るY E Gの役に立つ日本Y E Gでありたいと願い活動してまいりましたが、過日行われました翔生塾、3月最終役員会の開催をもちましてすべて終了いたしました。春の会長会議に始まり秋のブロック大会、11月には全国大会大分大会、そして2月のいしかわ加賀会議と行く先々で皆様に歓迎していただき楽しい、そして価値ある時間を共有させていただきましたことに心より感謝と御礼を申し上げます。そのほかにも多くの街にうかがい、地域の豊かな個性を楽しみ、おいしいものを食べ、杯を交しながら皆様と地域、そしてY E Gの未来を語り明かした記憶は私の人生の大切な宝物になりました。また、会長が行くと現地の皆さんが対応に大変な思いをするんだなということにもいまさらながら気づきました(笑)。関係者の皆様、どうもすみません、そしてありがとうございました。今年は優秀で素晴らしいスタッフに囲まれ大変気楽に多くの事業にチャ

レンジさせていただき、私自身多くの学びと気づきがありました。その中でもとりわけ地域で商工会議所が果たすべき役割の重要性と地域の側から出来ているY E Gという組織が秘める素晴らしいポテンシャルや可能性に気づきました。地域の未来はそこに住む者が創るしかありません。そしてそれは商工会議所の役目でありますしY E Gの仕事でもあります。皆様がそれぞれの地域に元気な、そして心地よい故郷の新しい風を起す日を心より楽しみにしております。1年半の間、本当にお世話になりました。ありがとうございます。

会 長
國 枝 恭 二



この1年、予定者段階から含めると1年半になりますが、この間の活動を振り返ると、その職責を果たせなかったという思いばかりが募っております。特に、担当の“地域創造・支援特別委員会”の皆様には大変なご苦勞をおかけしたなど反省するばかりであります。当初計画にはなかった「全国会長研修会」の研修内容担当になることについて、全員一丸となって取り組んでいただき、そして結果を出していただいたことに対しましては、本当に頭の下がる思いであり、ただただ御礼申し上げるしかありません。更には、昨年の全国大会前に体調を崩し担当副会長としての役割を、全く果たせなくなったにもかかわらず、國枝会長、鳥澤専務理事をはじめ執行部構成者の皆様からのご指導のもと、西村委員長を中心に何ら問題なく事業進捗がなされていることに、改めて委員各位

の資質の高さとその行動力に対しまして敬意を表すると共に御礼と感謝を述べさせていただきます。本当に有難うございました。

最後に申し上げます。平成18年度國枝会長のもと全国の会員諸兄と同じ時空を共有し活動できたことは大きな誇りであります。会員各位と共有したY E Gへの熱い想いを、来年・再来年、そして未来へと繋げていただけることを心よりお願い申し上げまして、“感謝！”のご挨拶させていただきます。有り難うございました。

副 会 長
鈴 木 順 三



東・西地区担当の存在感のある2人の副会長には生まれ、影の薄い中地区担当副会長でしたが、一年間ありがとうございました。

國枝会長のもと、「地域のため」を意識して、さまざまの方と語り合うことも出来ました。そして私自身、多くのことを学ぶこともできました。

ビジネスプランコンテストにおいては、前回応募、受講した私から見ても、研修内容はさらにブラッシュアップされており、研修中に応募された方々それぞれの頭の中で、事業が整理されていき、自分が進むべき道が見えてくるのが、傍から見てるととても感じられました。

研修直後、「参加してよかった」との声をいただきましたが、さらにその後参加された方々とお会いして、事業化を進められた話を聞いたりしたことが、特にこの事業のすばらしさを実感する瞬間でした。

Y E G大賞においては、全国各地で行われているY E

G活動にふれることができ、Y E Gのすばらしさを再認識しました。全国会長研修会においてその集大成を全国各地の会長たちに見てもらえたことも価値があったと思います。また、他の委員会と加賀Y E Gと一緒に、すばらしい会長研修会を開催できた一助にもなった事業であったと思います。

今年の研修委員会は、私が研修委員長を務めた平成16年度に比べ、担当する事業数も多く、大変な一年だったと思います。会議のスケジュール上、私はあまり委員会に参加できなくて残念でした。北出委員長をはじめとする研修委員会の皆さん、たいへんお疲れさまでした。

副 会 長
池 戸 一 成



2月の加賀会長研修会が終了し、いよいよ平成18年度も終わりが近づいたなとしみじみ感じます。副会長の要請があった約1年半前、『國ちゃん、副会長自分で本当に良いがかえ？ちゃんとした人にしいや。』と國枝会長に問い詰めた事が昨日のように思い出されます。迷惑を掛けることも無く1年間無事に終えることができ、自分自身本当にうれしく思っております。

さて、担当のY E G改革推進会議では、若手官僚と議論する場が頻繁にあり、昼間の会議から夜中までの懇親会で、日本の将来について真剣に意見をぶつけ合ってきました。国の考え方、若手官僚の純粋な日本を愛する気持ちを十分理解でき、自分達と同じベクトルで進んでいる事をひしひしと感じ、政治や官庁が今までより身近に感じられるようになったことは大きな収穫となりました。

九州、四国、中国ブロックの春の会長会議とブロック大会には西地区担当副会長として参加してきました。各

ブロックとも素晴らしい大会で、各単会の心意気を感じました。

本年度、Y E Gは本当に素晴らしいということを再認識しました。組織として話を聞いてくれる認知された団体であること。また、各地域にネットワークがあり、そこにはコミュニティがあること。パワーがあること。若者が各分野で活躍できる土台があること。本当に恵まれた環境だと思います。自分は卒業しますが、Y E Gがより一層発展し活躍される事を心より願っております。

最後になりますが、今年1年皆様のご協力本当に有難うございました。また、色々な出会いと経験をありがとうございました。心より感謝いたします。

副会長
味本 隆



この一年を振り返ってみて一番感じるのは、時が過ぎるのが非常に早かったことです。春の会長会議、秋のブロック大会、全国大会、全国会長研修会と日本を約2周まわらせていただきましたが、あっという間の一年でした。

副会長と言う大役を仰せつかり、企画委員会を担当させていただきましたが、企画委員会の皆さんには、何もお役に立てることなく一年が過ぎてしまったように思い反省しております。平成21年度から年間サイクルの変更に伴い、企画委員会の役割は非常に大きく、開催の手引書並びに開催要項の見直しも切羽詰った状況でしたが、伊藤委員長を中心とする委員の皆さんは、そんな大仕事も難なくこなし、常に前向きに笑顔で活動している姿が印象的でした。

私事で恐縮ですが、一昨年登別で開催された全国会長研修会の総会で、会長候補者のご承認を頂き、平成18年度は國枝会長にべったりスケジュールを共にさせていただき、会長としての行動、発言を勉強させていただきました。いよいよ19年度、日本Y E G会長という大役を正式にスタートさせていただきます。18年度の皆様をはじめ、各単位Y E Gの皆様にも、18年度と変わらぬご指導ご鞭撻、ご協力を宜しくお願い申し上げます。

副会長
原田 隆司



平成18年度専務理事として活動をしてきましたが、皆様のお陰をもちまして何とか一年間乗り切ることが出来ました。予定者から含めると実質的には一年半の歳月でしたが、人生で最も忙しく、最も充実した年になりました。本当に皆様には感謝と御礼の言葉しか出てきません。

私自身は日本Y E Gに出向して7年になりますが、日本Y E Gのスタンスが徐々に変わってきたような気がします。連携と研修研鑽をする組織から、地域の声を集めるシンクタンクとしての意味が強くなってきたと思います。近年、利用価値の高い日本Y E Gという言葉が叫ばれてきておりましたが、まさしく今年是实现する一歩となった年であります。地域の声を集め、さらに一歩先へ進む、つまりは国や行政に対しての提言活動を行ないました。また、そのための国や行政への窓口としてのパイプ作りを推し進めました。

それと同時に、自分たちが商工会議所の一員として何

が出来たのかを全国に問いかける年でもありました。地域の中で本当に必要とされる為には？何が必要か？そんな理想を掲げるY E Gが商工会議所の中で発言できる場所を増やす為に、各地商工会議所における常議員会へのY E G代表の出席を日商山口会頭から全国の商工会議所に発信して頂くと同時に、大分宣言として私たちも推進していくことを決意しました。

そんな変革の年であった平成18年度に、専務理事として皆さんと接したことを今後のY E G活動に活かす事をこれからの使命として邁進を続けます。

一年間ありがとうございました。

専務理事
鳥澤加津志



大分宣言

平成18年11月11日
第26回 全国大会大分大会



「宣言文」

我々は、日本商工会議所青年部に所属する400単位会議所定款に青年部が明記・位置づけされること、また各単位会議所常議員会に青年部代表者が常議員会構成者として出席して意見を述べるができるよう、各単位会議所をお願いし、それをゆるぎなく推進していくことをここに宣言いたします。

我々商工会議所青年部は、商工会議所の組織基盤を強化し、商工業の改善発展に寄与するために、平成13年5月24日、“商工会議所青年部を会員とする全国商工会議所青年部連合会を置く”として、全国商工会議所女性会連合会とともに日本商工会議所定款に明記され、その組織が日本商工会議所の一部として正式に認証されました。

また、本年9月20日開催の日本商工会議所第554回常議員会・第197回議員総会において、商工会議所の運営基盤の一層の強化と全国商工会議所の連携強化を図る観点から、①青年部および女性会未設置商工会議所における青年部および女性会の設置、②日本Y E Gおよび全商女性連への加入、③定款への位置づけ、④代表者の常議員会への出席について、推進することが決議されました。

それを受け、我々としても商工会議所活動の重要な役割を担うべく、各単会の定款に青年部を明記・位置づけしていただくと共に、常議員会に青年部会長が出席し、意見を述べるができるよう各単会議所をお願いしていくことを、我々の運動の中心の一つとします。

◆大分大会紹介◆

— 11月9日 —

●前泊者懇親会●



全国大会大分大会「Love & Earth～Y E Gの恵みと大地の恵み～」前泊者懇親会の幕開けです。場内はダウンライトに。まずは別府一流の流しコンビ、八ちゃんぶんちゃんの登場で場内は盛り上がりました。ギターを弾いていたぶんちゃんはテレビに出るほどで、あの明石家さんまさんとも競演をした有名人とのこと。つづいて津村九州ブロック代表理事の開会挨拶。今までの想いが込められた感謝の挨拶でした。そして我々がミスター、日本Y E G國枝会長の挨拶です。明日からの大分大会に向けた意気込みが伝わり皆気持ちが一つになったのでは？更に、全国大会・大分大会の工藤大会長挨拶では、歓迎と登録3,600名の御礼、そして大会に向けた力強い努力の挨拶でした。

乾杯の発声は、西地区味本副会長の音頭により盛大におこなわれました。

翌日から始まる大会の良いスタートになりました！

広報委員会 茨城県 日立Y E G 小野崎 久 雅

— 11月10日 —

●表敬訪問●

國枝会長、工藤大会会長、原田副会長、鳥澤専務理事、戸田顧問

と広報委員長で別府市役所で浜田博市長、大分市役所で釘宮磐市長、大分県庁で広瀬勝貞知事、大分商工会議所で安藤昭三会頭に表敬訪問しました。途中で九州一周駅伝の渋滞に巻き込まれるハプニングも発生しましたが無事訪問することができました。

各表敬訪問では温かい歓迎のお言葉と全国の商工会議所青年部への激励と期待のメッセージ、大分の自慢話に花が咲きました。参加者一同は、Y E Gへの期待の高さに対して、喜びと緊張を胸にして表敬訪問地をあとにしました。

広報委員会委員長 島根県 松江 Y E G 大谷 辰夫



●分科会●

広報委員会からは、第二分科会と第四分科会の取材にいきました。

●第二分科会「国際交流と温泉ツーリズム」別府市湯布院

大会市から湯布院までバスで移動。湯布院着後参加者は各々に昼食、散策を楽しみました。

湯布院散策には少し時間が足りないような感じがありましたが、参加者それぞれお目当てのスポットは巡る事が出来たと思います。

金鱗湖～湯の坪街道（お土産店等）～駅前通を歩くと、観光客向けの湯の坪街道と地元商店街の駅前通りの散策は、商店街活性化に視点を眺めてみると勉強になりました。捉え方は人それぞれでしょうが、物品売買の場としてだけではなく散策の楽しみを味わう事の出来る商店街でした。

商店街の活性化という当事者（商店街関係者）の経済的事情に重点を置いてしまいがちですが、「人を楽しませる」という事が置き去りになりがちです。それを見直す機会だったと今回の湯布院散策分科会で感じました。



広報委員会 岐阜県 関 Y E G 野田 雅之

●第四分科会 佐賀関～海部（あまべ）の里コース～

佐賀関 Y E G の会長と現役漁師のメンバーの案内の下、今や日本で知らない人がいないほど有名な「関さば」「関あじ」のふる里での分科会が開催されました。ここでは、豊後水道「速吸の瀬戸」付近で生まれ、佐賀関沖の瀬に住み着く日本でも数少ない「瀬付き魚」を、餌は疑似餌かゴカイといった伝統を守るこだわりと、昔ながらの一本釣り漁法を駆使して、その味・ブランドを確立しているとのことでした。そんな説明を車中や漁協で伺い、待ちに待った昼食。さすがは漁港です！「関あじ」「関さば」が、其々の皿に盛り付けられ、分厚く切り分けられた「関あじ」は歯ごたえ抜群！他では味わえない食感を堪能いたしました。「関あじ」も旬ではないとのことでしたが、甘みがあり大変おいしく、参加者は大満足でした。



広報委員会 埼玉県 上尾 Y E G 原田 嘉明

● 第四分科会 津久見市 ～日本のセメントの町つくりとマグロ三昧コース～

大分市から高速バスで約1時間かけて津久見市に着きました。バスの中で、津久見YEGメンバーによる聞きやすくして流暢なおしゃべりの案内のお陰で楽しい移動時間となりました。

向かったのは津久見の漁港でした。カスガ水産様のマグロ加工工場の見学をして後、完全に凍ったマグロとともに-60℃の白銀の世界を体験しました。寒すぎです！そして刺身となべを堪能し、バスにて石灰石鉱山に到着。ここで使われる約1億2,000万円のとてもでかいダンプと約1億3,000万円のバケットを見学してびっくり！そのスケールの大きさに600mの山が削られて200mの高さになったのもうなずけました。メンテナンスは10年で1億円もかかるそうです。下山するとすでに時間が過ぎていて、太平洋セメントはバスで工場をグルグル見学することになりました。鉱山であまりの大きさに見とれすぎたために予定時間オーバーの分科会となりました。



広報委員会 愛知県 岡崎YEG 河合 秀明

● 経営革新講演会 ●

大分文化会館において「経営革新講演会」が行われました。講師はNRI野村総合研究所上級コンサルタントの清澤正（きよさわただし）氏。「ファミリービジネスとリーダーシップ」の演題で始まった講演は、私たちYEGメンバーの立場を十分に配慮した上で、時代の要求、潮流に見事適応した内容であったと思われま



ここ10年強に亘り世界的にファミリービジネス企業に於ける価値経営の「秘めたる強さ」は注目を集め、日本においてもファミリー（即ち創業者や創業精神）への求心力をもつ企業の強みが見直され始めています。ファミリービジネスの根底に流れる創業者精神を、強いリーダーシップをもってファミリー全体で力を集結させ継承してゆく事こそ真のファミリービジネスの創生につながると感じました。

分科会と時間が重なり、会場が満席にならなかったことは残念でしたが、清澤正先生のお話はわかり易く、熱のこもった語り口で今後の経営に役立つ有意義な講演会でした。

広報委員会副委員長 静岡県 富士YEG 吉川 隆裕

● 故郷の新しい風フォーラム ●

日本YEG2万6千人研修会「故郷の新しい風フォーラム」は大分大会最大の企画となりました。

動員計画も2,000人と、YEG改革推進会議企画の意気込みが感じられる研修でした。日本をになう若手官僚と日本YEG役員の本気の、本音の交流を見させていただきました。参加人数もYEG改革推進会議の努力、またYEGの役員はじめ、九州ブロックの協力で約1,200人の参加となりました。



YEG改革推進会議後藤議長の談によると「私たちYEGにはエネルギーがあります。このエネルギーを地域経済の活性化に正しく使っていくためには、時代の先を見据える目と思考を持たなければならないと考えています。そしてそのためにはYEG以外の人との連携強化が不可欠であり、今回の『故郷の新しい風フォーラム』がその1つのきっかけになってくれたら幸いです。」とのことでした。今回の研修は終わりではなく、2月の会長研修会にも新たな企画が期待される素晴らしい研修でした。

広報委員会 沖縄県 浦添YEG 東江 晴都

● Y E G ビジネスプランコンテスト ●

今年も昨年に負けない事業が多数紹介されました。どれも遜色のない魅力あふれる事業でした。「Y E G ビジネスプランコンテスト」は、Y E G 会員事業の中にあるすばらしい技術・ノウハウを会員各位に紹介し、また刺激し合うことで、日本Y E G を活用した事業の更なる発展に繋がります。

研修委員会を中心に、事業の告知・研修・発表までと大変な作業を参加者のフォローもしながらここまで進めて頂き頭が下がります。なにより終了後のプランの参加者・研修委員会メンバーの顔をみるとだれもが満足した笑顔で本当にすばらしい事業でした。

☆グランプリ

埼玉県 草加Y E G 小林 和好
「中小零細企業の異業種連携による中国進出
～集え！輝け！小さき星たち～」



☆準グランプリ

静岡県 浜松Y E G 杉野 降三
「【あんしん】【快適】マンションリフォーム企画（仮称）」



☆準グランプリ

茨城県 水戸Y E G 岩下 由加里
「古民家風家屋を活用した元気になる・要介護度改善のための介護サービス事業」

広報委員会 福井県 鯖江Y E G 園 昇

● 第47回通常総会 ●

全国から327名（出席：194名、委任状出席：133名）の議決権者と多数のオブザーバが集まり会場に入れない状況になり、日本Y E G に対する熱い思いを感じる総会となった。

原田副会長の開会宣言に始まり、國枝会長が議長で審議・報告が進行され、平成17年度事業報告、18年度の各ブロック・委員会報告が各代表による報告、平成19/20年度の全国大会・会長研修会・平成19年度のブロック大会等の開催地・開催日が発表された。

審議事項では、平成19年度会長予定者に、愛知県連豊田Y E G の原田隆司君が選出され、同時に次年度役員・監事合計65名が指名され、満場一致で承認された。



広報委員会 岡山県 岡山Y E G 森 徹

● 大懇親会 ●

大分城跡公園に巨大仮設テントを設置して大懇親会が行われました。会場には各ブロック大会の垂れ幕も掲げられました。

オープニングセレモニーでは、工藤哲弘大会会長、日本Y E G 國枝会長の主催者挨拶と大分県知事広瀬勝貞様と大分市長釘宮磐様の来賓の挨拶と続き、大分市議会議長長田みちお様の乾杯で祝宴がはじまりました。

懇親会が盛り上がったところに加賀会長研修会と来年度千葉大会キャラバン隊が登場！千葉県連のキャラバンはサンバのコスチュームで登場。かなり刺激的でした。又、各ブロック大会の報告並びにプレゼント抽選会がありました。北海道ブロックのプレゼントのかにが地元帯広に当たってしまうハプニングもありました。

最後に次年度原田会長予定者の万歳三唱で幕を閉じました。



広報委員会 秋田横手Y E G 高 橋 まゆみ

— 11月10日 —

●お出迎え●

記念式典の開始前に大分県連の皆様、日本Y E G役員、次年度全国大会開催地の千葉県連の総勢200名とミス別府の2名で全国3,600人のY E Gメンバーのお出迎えしました。

全国のメンバーは会場の看板の前で記念写真を取って全国大会参加の気持ちを高ぶらせていました。



広報委員会委員長 島根県 松江Y E G 大谷 辰夫

●第26回全国大会『大分大会』記念式典●

記念式典では、地元松永新体操クラブの新体操の演技披露と日本文理大学ブレイブスによるチアリーディングで景気よく開会し、全国大会大分大会実行委員長甲斐信孝君の開会宣言で始まりました。

冒頭、國枝恭二会長より、「Y E Gメンバーがここ大分に集結し、出会いと交流そして研鑽を図ることが、未来への大きな力となることを願っている」など挨拶がありました。

また、日本商工会議所山口信夫会頭からは、「創意と工夫をこなし、まちづくりに貢献できるよう期待している」などご挨拶をいただき、九州経済産業局局長川口修様・大分県知事広瀬勝貞様・大分市長釘宮馨様・別府市長浜田博様からもご祝辞をいただきました。

その後、平成19年度日本Y E G会長予定者原田隆司君の紹介、大分宣言が採択され、全国大会実行委員会筆頭副会長の鎗丸明晃君の開会宣言で閉会となりました。

広報委員会副委員長 岡山県 西大寺Y E G 根木 克己

●記念講演●

講師 丸紅株式会社
取締役会長 辻 亨 氏
(大分県竹田市出身)



講師 日本生命保険相互会社
代表取締役会長 宇野 郁夫氏
(大分県日田市出身)



別府ピーコンプラザにおいて、辻様との宇野様をお招きして「大分出身の両氏が語る日本の未来」「総合商社から見た経済の現状と身通し」をテーマに対談形式の講演となりました。

まず辻様から経済現状をパワーポイントで数字にてご説明いただきました。いかに現在の日本の景気動向が世界的に見ると緩やかであるかに気づかされ、日本の先行きに内心不安を感じました。中小製造業のアジアの現地法人数は数年前から中国とASEAN4に集中して増加しています。アジアの動きから先をよく読むこと

が中小企業がこれからは生き抜く鍵になるといいます。

宇野様は、「会社の強さは形態ではなく、人である。」と説かれました。どちらもごもつながら我々に足りないものではないのでしょうか？「凡事徹底」ということでしょうか。宇野様の会社は株式会社ではなく相互会社ですが、これは買収等にあわないための対策だそうです。ヨーロッパでは、買収や合併によって株式に変えた数百社の中で残ったのは3、4社だったそうです。日本生命保険相互会社はその中で相互会社であったため現在このような形にまでなった、まさに形態ではなく人であったからではないのでしょうか。

以前、松下幸之助氏の本を読んだことがあります。そのことを思い出しながら、宇野様のお話を聞かせていただきました。前ばかり見てつっぱしていたあのころの初心を忘れることなくこれからもがんばっていきたいとがんがえさせられる講演でした。

広報委員会 愛知県 岡崎 Y E G 河合 秀明

● 解 団 式 ●

記念式典と記念講演が終了し、全国大会大分大会の解団式が行われました。まず、國枝会長から主管地である大分県連へ、工藤大会長から協力していただいた皆様に、そして最後に甲斐実行委員長と大分県連のメンバーから参加していただいた全員に涙のお礼の挨拶があり、大分大会が終了しました。



広報委員会担当専務理事 埼玉県 上尾 Y E G 鳥澤 加津志

● 主管地への御礼挨拶 ●

全行程が終了。

会場出入り口に集合した主管地大分県連のメンバーと日本 Y E G メンバー。國枝会長より、お礼の挨拶。そして、甲斐実行委員長と工藤大会会長からも、皆様への挨拶が交わされた。

『ありがとうございました！感謝です！』

大分県連を中心に丸となって開催されるまでの苦労が走馬灯のように目の前を駆け巡る。甲斐実行委員長の感極まったの震える声。ピーコンプラザの高い天井を見つめたまま、一線の男の涙を流した工藤大会会長。その思いを心で受け取った皆の歓喜の涙。Y E G スピリッツ・・・この空気を感じた会員は、きっとそれぞれの地域で何かをやらなければならないという使命感を抱いたに違いない。



Y E G は地域でリーダーシップをとっていかなければならないだけの責任がある。その責任を行動する事により表し、自企業の発展と共に成長させねばならないと強く思った。

大分県連へ贈った皆の鳴り止まない拍手は、「地域が創る日本の未来」を奏でるリズムにも聞こえた。

広報委員会 長崎県 大村 Y E G 野島 進吾

● 大分大会イベント ●

○ビジネス交流会・大分うまいもの物産展

大会会場のロビーに於いて大分県連 Y E G 所属と各地 Y E G 企業と会員外 1 企業、全 14 社がエントランス広場にて自社の P R を行ない、合わせて企業間の交流と販売を行いました。

入り口付近では大分うまいもの物産展が開かれました。大分のお菓子・焼酎・うどん・焼き鳥・関さば・関あじなど、物産品の販売や行列のできる屋台もありました。



いしかわ加賀宣言

第24回全国会長研修会「いしかわ加賀会議」。平成19年2月16日の午後から行われた「大討論会」において全国からさまざまな意見が発言されました。その発言内容を第24回全国会長研修会「いしかわ加賀会議」大会会長中村隆泰が大討論会参加者の意見をまとめ、いしかわ加賀会議の閉会式において以下のように「いしかわ加賀宣言」を宣言しました。

「地域が創る日本の未来、故郷の新しい風Y E G」をスローガンに掲げ、「權を漕げ！帆をあげろ！時代の風はY E G」を開催地テーマとし、私たちY E Gは、ここ加賀市で第二十四回全国会長研修会「いしかわ加賀会議」を開催いたしました。

昨日の大討論会において参加者のみなさまから、多くの熱い意見が投げかけられました。

全国各地では商工会議所活動に対し、様々な意見があり、また問題も山積しています。だからこそ、地域経済の活性化のためには商工会議所の取り組みが重要であり、地域のリーダーである我々は切磋琢磨しながら、地域のブランドを生かした活動をして行くべきという提言がなされ、会場の皆様の賛同を得ました。

その想いを心に刻み、ここに「いしかわ加賀宣言」を行います。

「いしかわ加賀宣言」

私たちY E Gは、地域再生、日本再生のため、自己研鑽に励み、すべてのY E Gが、それぞれの地域の特性を生かし、経済振興策を含めた建議・提言活動を行い、その取り組みを発信していくことを目指す。

平成十九年二月十七日

第二十四回全国会長研修会「いしかわ加賀会議」 大会会長 中村 隆泰



◆いしかわ加賀会議紹介◆

－ 2月15日 －

●前泊者懇親会●

18年度の集大成といえる加賀会長会議のスタートにあたり、加賀市山代温泉瑠璃光にて前泊者懇親会が開催されました。

初めに加賀会長会議定者実行委員長からの「この会議の準備にあたり執行部の方々に毎日何度も問い合わせをして今日を迎えた。全国Y E Gの熱意と情熱で成功に向けた2日間にしたいたい。」との熱い挨拶で始まりました。

つづいて日本Y E G國枝会長の挨拶では「初の試みである大討論会においてY E Gからメッセージとして全国のY E Gにどんなものを持ち帰るか？地域の代表とした商工会議所の役割が重要になる。」などの挨拶でした。

来賓を代表して加賀市長大幸様の挨拶は「その国を知りたいければ、その国の青年を見よ。」と素晴らしい一言が印象的でした。

その後来賓の紹介があり、加賀市議会議長の西出様により乾杯の音頭で懇親会へ。途中、加賀Y E Gメンバー音楽演奏や各プロ代によるご当地抽選会、全国大会千葉大会、長崎会長会議PRがあり終始盛り上げりの前泊者懇親会でした。

広報委員会 茨城県 日立Y E G 小野崎 久 雅



●開 会 式●

中村隆泰大会会長のY E G宣言・開会の辞によりいしかわ加賀会議が始まりました。日本Y E G 國枝恭二会長、日本商工会議所篠原徹常務理事、加賀Y E G定者豊会長、加賀商工会議所新家康三会頭の挨拶のあとに経済産業省中部経済産業局長佐藤樹一郎様、石川県知事谷本正憲様、加賀市長大幸甚様、石川県商工会議所連合会会頭深山彬様の来賓祝辞と進行し、守岡伸浩大会副会長の閉会宣言で開会式は終了しました。

広報委員会委員長 島根県 松江Y E G 大 谷 辰 夫

●第6回Y E G大賞●

Y E G大賞の募集は平成18年8月25日(金)から始まり、一次審査、二次審査を経て9事業に絞られ、15日に公開最終審査が行われ、16日に発表されました。石川県商工労働課経営支援課課長桜井様、加賀商工会議所専務理事新井様と日本Y E Gの平成13年度会長古泉様他11名で審査が行われ、グランプリ・敢闘賞が決定しました。熱い想いのプレゼンテーションと白熱した審査会。まさにY E Gマインドがここにありました。受賞おめでとうございます。



■Y E G大賞 グランプリ

●地域部門

【関東ブロック 栃木県連 栃木Y E G】

事業名：栃木Y E G創立20周年記念事業『邑波川きらきらフェスティバル』

●組織部門

【関東ブロック 静岡県連 浜松Y E G】

事業名：政策提言『将来を担う子どもたちにとって 豊かな郷土「浜松」の創造』と、
親子体験型学習事業『Hearts, Hands, Kids, はままつ2006』



●企業部門

【東北ブロック 福島県連 福島Y E G】

事業名：街なか賑わい創出事業 ふくしま屋台村企画

■敢闘賞

●地域部門

【九州ブロック 宮崎県連 串間Y E G】

事業名：エコロジーくしま（地球を救う）

【九州ブロック 長崎県連 佐世保Y E G】

事業名：第2回させぼシーサイドフェスティバル2006

●組織部門

【中国ブロック 岡山県連 岡山Y E G】

事業名：四国アイランドリーグ公式戦 岡山Y E Gシリーズ&少年野球教室

【北陸信越ブロック 新潟県連 新津Y E G】

事業名：イベント物販 義援金積み立てるぞ！事業

●企業部門

【近畿ブロック 福井県連 福井YEG】

事業名：福井YEG おしごと探検隊 “アントレ・キッズ”

【北海道ブロック 北海道連 石狩YEG】

事業名：石狩市電話帳作成事業

広報委員会 愛知県 岡崎YEG 河合 秀明

●大討論会●

大討論会は地域創造・支援特別委員会と加賀YEGとの連携で準備した企画として、平成18年度日本YEGの大きなイベントとなりました。参加者全員を対象に「これでいいのか？YEG 待ったなし！地域再生 日本再生 地域のリーダーは君だ！」をテーマに行われました。

キャスターに西村晃氏、コメンテーターに、中山正邦浜松商工会議所会頭・鈴木英敬内閣官房参事官補佐・京都YEGのOB河合純氏・鈴木順三日本YEG副会長、また会場内より選ばれたYEGメンバーにて、討論会が始まりました。



西村氏は全国の商工会議所にて講演をされ、地域の事・商工会議所の事を良く熟知された上で、活発な意見交換をしてくださいました。各コメンテーターには、地域の事情・国の立場・日本YEGとしての方向性をそれぞれ話して頂きました。

「YEGは商工会議所に対し、提言を行っていこう」「YEGメンバーが常議員になろう」「もっと、商工会議所と連携を取り、意見、建議、地域の活性化、街づくりをしよう」という目的を持って「我々YEGが変わり、商工会議所が変わって行かなければならない」との認識を持ち、討論会は終わりました。討論会に参加したメンバーからも、これからのYEGのあり方について有意義な勉強になったとの感想がきかれました。

この大討論会は「いしかわ加賀宣言」として未来に残る大討論会となりました。

広報委員会 岡山県 岡山YEG 森 徹

●大懇親会●

ホテル百万石大広間『兼六』に於いて、全国より約900人のメンバーが集い、大懇親会が始まりました。

宴の前に、能で参加者を歓迎。続いて日本YEG國枝会長が、参加者にお礼と歓迎の挨拶をしました。続きまして加賀YEG会長定者実行委員長の挨拶につづき、加賀市長大幸甚様より度肝を抜く挨拶が！その後日本商工会議所篠原常務理事の挨拶と続き、乾杯は加賀商工会議所新家会頭より音頭を取って頂き、盛大に懇親会が開催されました。

「懇親会場では全国の友と再会を喜び、久々の酒を酌み交わし、色々な話に花を咲かせました。単会の次年度会長も全国の仲間と交流を深め、来年の再会を約束しました。」

懇親会は平成19年度11月に行なわれる全国大会千葉大会と2月全国会長研修会長崎塾のPRのあとに中締めとなり、加賀の街は青年部で埋め尽くされ、長い夜の始まりとなりました。

参加者は言葉や文字で表せない心のこもった大懇親の接待に、そして加賀YEGメンバーに感謝しています。



追伸 参加出来なかったメンバーにお伝えします。先に触れました加賀市長の度肝を抜くお言葉です。「先ほど、言いましたのでありません。終わり。」とこれだけです。



大懇親会の前に行なわれた式典でも挨拶されたのでこうなったのでしょう。加賀市長大幸甚氏の名前は一生忘れない気がします。



広報委員会 青森県 弘前YEG 佐藤浩之

－ 2月16日 －

● 故郷の新しい風・総括 ●

國枝会長が掲げる「地域が創る日本の未来 故郷の新しい風YEG」このスローガンに込められた想いを凝縮したともいえる「故郷の新しい風・総括」は平成18年度の特別委員会の地域創造・支援委員会とYEG改革推進会議の活動報告と発表から始まり、ソフィアバンク代表・多摩大学大学院教授田坂広志氏の講演『荒海に漕ぎ出す「勇気」と時代の風をとらえる「センス」若き企業家が、この国を変える』と続き



ました。
この講演の中で田坂教授は我々若き企業家に対して三つの変革を訴えました。第一の変革は「企業中心市場」を「顧客中心市場」に。第二の変革は「知識社会」を「共感社会」に。第三の変革は「営利追求企業」を「社会貢献企業」というものでした。



続けて田坂教授は、我々は現在の世界で「最も恵まれた人間」であり自覚すべき五つの条件がある。「第一 半世紀以上戦争の無い平和な国」「第二 世界第二位の経済力の国」「第三 最先端の科学技術が開花した国」「第四 医療が発達した健康長寿の国」「第五 国民の大半が高等教育を受けられる国」と説き、この類まれな恵まれた人間が自覚すべき「義務」がある。「義務」を言い換えるならば「使命」であり「使命」＝「志」を抱きながら「三つの変革」通してわが国における資本主義の在り方」を変えることこそ我々若き企業家の成すべき事だと私達に熱く語ってくれました。



最後にステージに立った後藤議長は「気があっても行動を起こさなければ駄目だ。“自分を信じること→自信”、“地域を信じること→地信”、自信と地信の二つが大切だ」と訴え「あなたの起こす小さな風が、地域を変える」と結びました。

広報委員会副委員長 静岡県 富士YEG 吉川隆裕

● 第48回通常総会 ●

第48回通常総会は鈴木副会長の開会宣言に始まり、國枝会長が議長で審議・報告が進行されました。議案として

- ①平成19年度役員選任に関する件
- ②平成20年度会長候補者選任の件
- ③平成19年度事業計画（案）
- ④平成19年度収支予算（案）

が審議され満場一致で承認されました。平成19年度事業計画（案）



に関しては会長予定者原田隆司君が説明し、19年度収支予算（案）に関しては専務理事予定者の浅井秀明君が説明しました。



18年度事業のブロック活動報告においては各種大会での参加・協力のお礼をブロックを代表して北信越ブロック代表理事佐藤悟君がしました。また各種委員会報告については、各委員長の報告説明時に委員会メンバーがステージ前に整列しお礼の挨拶を行いました。各委員長は短い時間で1年間の報告を熱く説明していました。

平成19年度会長予定者として原田隆司君が挨拶した後、直前・副会長専務理事・各ブロック代表理事の紹介があり、代表として近畿ブロック代表理事大西聡君が挨拶を行いました。その後19年度各委員会の事業説明を担当専務理事・副会長・委員長がステージに上がりステージ前には委員会メンバーが整列し、委員長により平成19年度の活動説明が行われました。

最後に加賀YEG専務理事により閉会宣言がおこなわれ総会は無事終了しました。

広報委員会 福井県 鯖江YEG 園 昇

● PR / 閉会式そして解団式 ●

いしかわ加賀会議のメニューは無事進行し、平成19年度の11月に行なわれる全国大会千葉大会と2月全国会長研修会長崎塾のPRが終了し閉会式となりました。次年度会長予定者原田隆司副会長の挨拶のあと國枝恭二会長から、次年度への期待を込めて400枚の種子入りはがきを渡されました。そして中村隆泰大会会長から「いしかわ加賀宣言」が高々に読み上げられいしかわ加賀会議は終了しました。



全国のメンバーが帰路についた会場のステージには、日本YEGの役員・専門委員、加賀YEGと副主管の石川県連が残っていました。開催の決定からこの瞬間までの長いあいだの汗が全て涙にかわりました。

この涙は終わったことによる感動の涙ではありますが、我々YEGにとっては通過点です。「いしかわ加賀宣言」をした私たちYEGは地域再生、日本再生のため、自己研鑽に励み、すべてのYEGが、それぞれの地域の特性を生かし、経済振興策を含めた建議・提言活動を行い、その取り組みを発信していくことを目指す道のスタートになりました。

広報委員会委員長 島根県 松江YEG 大谷 辰夫

解 団 式



全国商工会青年部連合会会長 大高 衛様対談

日時 平成18年10月7日

場所 千葉県野田市

司会（池澤雅至関東ブロック代表理事）：今日は同じ青年経済団体でありながら成り立ちが違う二つの組織でございますが、各トップの方の対談です。今後、いろんな交流が出来るようなきっかけになればと思います。対談をよろしく願いいたします。



****団体について****

國枝：日本YEGは全国を東地区が北海道・東北・関東、中地区が北陸信越・近畿・東海、西地区が中国・四国・九州と九つのブロック、三地区に分かれています。会員が約2万6千人、青年部数で399です。近くに1単会増えまして400になりますがその後合併で一つ減って399になる予定です。

各青年部の成り立ちは異なり、商工会議所の青年部として立ち上がったところ、J Cの卒業生があつまってきたところや政治活動からできた会もあります。会ごとに成り立ちも性格も卒業年度も違う、それが連合会として活動をしています。

大高：商工会青年部は商工会が昭和35年に商工会法で組織されて、その内部組織で昭和41年からできた会です。設立は早い所、遅い所ありますが、全国的には今年40周年を商工会青年部が迎えます。会員数は現在で約6万人です、単会数としては約2千4百単会あります。現在、郡部で大きく合併していますので来年度には2千単会ぐらいになると試算しています。

活動は地域貢献と経営普及改善事業です。商工会としては経営指導員さんが個々の事業所を回って金融面とか販路拡大の経営指導をしています。青年部は経営指導よりは地域貢献が多くて、地域の「お祭部隊」というような位置付けになっています。

國枝：商工会議所青年部も「お祭部隊」は同じです。祭とか活性化のイベントは街づくりには重要でみんな本気で手を貸しています。地域からもあてにされています。

****共存共栄****

國枝：平成大合併で行政が合併して市が大きくなったところが多いですね。その市の中に商工会議所組織と商工会が点在しているという状況になっています。これからお互いにならぬのか将来像が見えなくて困っていると思いますが、今後、青年部を含めた商工会と商工会議所の事業は同じ行政区域でどのように進めていくべきでしょうか。

大高：いろんな話を詰めていかないといけない部分たくさんあると思います。基本的にはお互いの団体の法律が違います。「商工会議所と商工会の法整備を行い、一行政地区に一商工団体となるように合併していくのが望ましい」と聞いたことがあります。私的な意見として運営がひとつになるのではなく、別々な運営をして、共同事業などを一緒に行っていくというのが好ましいと思っています。

國枝：北海道の帯広は十勝圏域で19市町村あり、合併せずにそれぞれに行政を行っています。行政は区域内の事業しかできないため、十勝という広いエリアで総合計画を作るセクションが存在しません。そのため、全体で大きなエリアのことを考えることができないのが一番の問題です。

商工会青年部と商工会議所青年部で広域に一緒に活動しようとしても「一番大きいところで、一番大きい団体で、一番多く人がいるところで・・・」という方向に進み、周辺の協力が得られない。結局一緒にできないという現象が出てきます。その点どう思うように思われますか。

大高：基本的には中心市街地活性化法があるように、やはり中心になる地域というのは作るべきだと思います。その中心になるところと、その周りに位置する地域が話し合い、しっかりとしたグランドデザインを作成し、それを我々はお互いの会員に理解してもらえるように説明をしていく責任があると思っています。



多くの地域では、中心地に商工会議所があり周りの郡部に商工会がある。連携を取りながら住み分けし、お互いの立場をしっかりと尊重しあえるような共同の政策を進めていけば生活しやすい街ができると思います。

國枝：そうですね。人が住んでいるところにはその地区の住民サービスや祭りがあります。小さいながらもいいイベントがあり、神社があり祭りがあります。そういうことは絶対残していかなければならない。それを地元の若い人達が残していく必要がある。また逆に全体のエリアの将来も全員で考えていかなきゃならないです。

大高会長はやはりいろんな所を見て知って、千葉という日本の中心に近いところから先進的な考え方をされていますね。

大高：商工会青年部は、大なり小なり補助金をもとに活動させていただいております。その結果として補助金頼みになる部分が組織の弱点と感じています。一会員として、これは是正しなければいけない、自分たちで独立独立歩できるような考え方もできないと商工会議所と共同して地域を守ろうとしたときに意識のすり合わせが難しいと感じています。



國枝：いっそのこと両方とも全部一から新たに作り直した方が早いという気がするぐらいに個性が違いますね。実際に郡部では商工会は商工会議所に吸収されるイメージがありますね。実は共存共栄になるということがなかなか伝わらないです。

大高：将来的に一行政区に一商工団体という可能性は想定されています。そこに行く前段階のレクチャーが必要です。特に補助金の問題は、今までの歴史や体質の問題で制度疲労をおこしています。全国を回って感じることは、今、変化を遂げないと大変なことになってしまう。無理やり一緒になったら表向きニコニコしていて、腹ではそう思っていないという一番よくないことになると思います。

だからこそ今は商工会議所青年部の考え方に少しは近づくために、地域貢献の比重を軽くしてもいいから、それ以上に経営の考え方や意識を高めよう、我々は経営者の団体だと認識することで経営者としてお互いが接点を持ちやすくなると思っています。

私は商工会議所青年部の事業や活動内容を拝見していますが、商工会青年部の会員と比べるとちょっとステージが商工会議所青年部のほうが一步上、いろんな決め事の中で成熟度が高い気がします。

商工会は、補助金を貰って上からやりなさいと言われてた受け身の団体の体質を濃く残しています。補助金がないと何にもやらないという悪い面があります。

もし、商工会が商工会議所の支所になったときに「商工会議所は支所に対してなにをしてくれるのですか？」という態度を取る可能性が高いです。そうじゃなくて地域はみんなで支えあうもので、自分の街は自分の責任で支える必要があることを理解していかなければならないと考えます。

商売が基本

大高：根本にあるのは全員経営者、若しくは後継者として商人としての感覚が必要だと思います。自分の商売をどうやっていくかという念を置いて地域貢献を考える。自分の企業が儲かればその儲かったお金は税にもなり、地域に還元することができるということが一番分かりやすい。

國枝：そうですね、商工会議所青年部も商売がきちんとできていないと地域のことには取り組むことはできませんね。

大高：無理して地域貢献をする必要はないですよ。商売が回っていないのに焼きそばや綿あめを作って笑っているのは好ましい姿ではありません。極端に言えば「めんどくせーな」と思って出てきても商売は上手く回っているほうがまだ良いです。

國枝：日本Y E Gの役員はみんなそれぞれに仕事しながら日本Y E Gに出向しています。日本Y E Gは自分の地域だけでなく、日本中の単会のことを考えて動いています。みんな本当にそういうイメージを持って活動します。結局何のためにやっているかといったら、人の繋がりがいずれは自分の商売に、地域にフィードバックするだろうと思ってみんな活動しています。

大高：「私は『長』という役目に着いたら責任がある。だから社長や会長や部長という名前で人から呼ばれるからには、長（おさ）の責任をまっとうしなきゃいけない。まっとうすることで自分の状況がきつくならないように努力しよう」と偉そうなことを言わせて頂いています。うちの会にも商工会の役職を引き受けたために「家業がほったらかしになって、家業がおかしくなった、商工会なんてろくなものじゃない」という人もいますが違います。「役職をやっていないでも会社は潰れる、何かのせいにするべきじゃない。自分がやっていないだけだと思って頑張ろう」という話をするとうち「お前はそうやって口だけ上手くして本当にやってるんだろうな」なんて冷

やかされることもあります。(笑)

地域の商売のことで言ったら商工会議所青年部と商工会青年部は同じですね。もっと話し合っていくべきです。

これからの時代は、青年部同士で少しずつでもビジネススマッチングさせていくことが必要ですね。

****共同作業の「お題目」****

大高:行政合併した地域のランドデザインについては、国の政策や各行政の考え方もありますので、単純に我々で決めて好き勝手なことはいえないと思いますが、提言はしていくべきだと思います。

そして、そうした意見を踏まえて行政が長期計画または中長期計画を立て、それに沿った動き方を市民や我々のような団体がしていくことが理想です。いままで、小さいエリアでひとつひとつバラバラだったから絵が見えなかったですが、商工会青年部と商工会議所青年部でエリアの広い活動、考え方の発想ができる気がします。

地域で商工会議所青年部と商工会青年部が共同事業を始めるために、最初は単純に酒飲み友達になろうでもいいと思います。とにかく交流していかないといけない、お互いに腹をわって話し合っていくべきですね。

國枝:信頼関係ができないと一緒に事業をやるという発想にもならないですね。広いエリアの将来像に対する意見を出し合いたいですね。個別のことをみんなで考えるのは難しいですが、全体のことはお互いの意見をどこかで集約して声を上げていく必要がある。それにはまず知り合いになって心が通じることが最重要ですね。

大高:全国を回っているとそういう話を聞きます。商工会青年部はどうしても臆しています。

日本商工会議所青年部と全国商工会青年部連合会が「各地域で共同作業をしよう！」ということを投げかけていく、「お題目があるからやってみよう」でも最初はいいと思います。各地域が年に一回、一緒に行動する。お互いに商売人同士ですから、自分の好き勝手なことを言って、相手のことは一切聞かないなんて言う人はそんなにいないと思います。是非、やるべきだと思います。

例えば日経新聞の広告面を使って國枝会長と私が握手しながらにこっと笑って「これからの社会は共存共栄だ！」とか何か文言をしっかりと決めて訴えかけていく。

國枝:なるほど。タイトルじゃないけどそういうきちんとしたシンボリックなものがあるといいですね。

****共同作業の一步****

大高:そのときにまだ商工会だとか商工会議所だとかかっていって臆しているかたがいたら「そんなこだわりは捨てましょう」と各地域の代表の方々にご理解いただく活動を全国商工会青年部としていきたいと思ひますし、ぜひ國枝会長の号令の元で賛同する商工会議所青年部のかたと共に行動していきたいと思ひます。

國枝:実際に共同で取り組んでいる地域もあります。今は商工会青年部と商工会議所青年部が交流しているというところも増えていますね。

でも、お互いの会に間に年齢的な問題があるようです。我々は高齢者も結構おりますので(笑)

大高:商工会青年部にもローカルルールがあります。県は絶対に40歳で卒業ですが、単会は45歳ぐらいまでのところがあります。

年齢的に近い感じがありますがやはり商工会議所青年部がちょっと先輩ですね。各単会で自分が最年長になったと想像していたら、商工会議所さんと一緒になるとまた地域の先輩がいらっしゃって、気が臆しています。全員ではないですがそう思っている方がいるのも事実です。最初の取り組みのときに上手く声掛けしていただけるようお願いいたします。「一緒にやろうね」と言っていたら一緒にやっているとあります。「一緒にぜひさせてください」とお願いの気持ちがあるぐらいです。

千葉県では野田市が先進的に捉えていただいています。野田地域では、関宿町の野田市関宿商工会青年部が野田商工会議所青年部と同じ行政区の中にあり、会議の時には必ず声掛けいただいて一緒に参加しています。合併しても顔見知りなので、非常に友好的に活動していると聞いています。

何か一緒に政策を、お互いのメリットのあることをする。おそらく商売に関わることと思ひます。商売から波及することが地域社会と思ひます。お題目を分かりやすい言葉にして、地域の責任者の方々がそのお題目を使って一緒に活動しようと思ひるものを作っていきます。

「政策協定」を打ち立てて発表するという流れができると大変ありがたいと思ひています。

國枝:お互いに地域に対する姿勢というのは変わらないので、地域への共通の方針・お題目を持つことはいいですね。基本はやはり地域にありますからね。ぜひ進めましょう。

大高:結局我々は地域経済人として商売で繋がっています。同じエリア内で広域に考えなければならないですよ。きちっと活動して、自分達の商売が上手く回ることを考えて、それが地域社会に貢献になると言い続けて、政策提言を発表したほうがいいと思ひます。

商工会議所青年部と商工会青年部が地域づくりと一緒に議論をして、住みよい地域を作るための提言を訴えていける会にしたいです。

國枝:そうですね、何をすべきか？どうあるべきか？まだ想像がつかないです。商工会議所青年部が考える街、商工会青年部で考える街。それが共存できる街、どうあるべきかの答えは難しいですね。いずれにしても行政区

が一つになるときにはこういう姿になるだろうというのが見ると説明しやすいですね。

大高：最終的には主体的に自分のこととして考えてもらえるかどうか勝負だと思います。やらされている感があるうちは「後継者」。自分がやらなきゃいかんと思った時点で「経営者」だと思います。会の運営でも自分でやりたい、自分がこうしたいと思うような会にしていくな必要があります。

今のままだと黙って意見を言わないような人が増えます。このまま商工会議所青年部と商工会青年部と一緒に事業しようという議論に入っていったら、何にもいわずに去っていく人たちがたくさん出ると思います。

國枝：今のままでは商工会議所と商工会が話し合いのテーブルにつくのはかなり難しいと思います。でも次の世代のメンバーが仲間同士として活動していき、テーブルに座って大きな視点で地域を考えるという話になります。今はベース作りになりますね。

大高：ぜひご指導いただきながら一緒に道を歩みたいと思います。踏み出さないと始まりませんので、一刻も早くはじめて、それが完成するのは20年後か30年後かという話かも分かりませんが・・・。

國枝：ただ、踏み出さないといつまでもできないですからね。

大高：ぜひそれは、私共もがんばりますので、周知をし

ていきますので、ご指導いただければと思います。

國枝：今日は本当にお忙しいところをありがとうございました。いろんな話が聞けて、僕自身もよかったなと思います。両組織で共通する地域に対する大きな指針というものを、互いに持つということは大事なことだと言われて初めて私も気づきました。ぜひいろいろなところでお会いする機会を作っていただいて、話が出来ればいいなと思います。

大高：よろしくお願いします。ありがとうございました。

國枝：今日は本当にお忙しいところありがとうございました。またこれからもいろいろな面で協力して頑張りましょう。

大高：ありがとうございました。



西川りゅうじん様対談

日時 平成18年7月13日

場所 東京（日本商工会議所会議室）

1. 西川りゅうじんプロフィールより

<http://www.raison.co.jp/profile.html>

- 本名：西川隆尋（にしかわりゅうじん）
 - 英語表記：Reugene NISHIKAWA
 - 生年月日：1960年（昭和35年）10月20日
 - 出身地：神戸市
 - 役職：商業開発研究所レゾン所長
 - 肩書：マーケティングコンサルタント
 - 学歴：一橋大学経済学部（1984年）及び法学部（1986年）卒業
- 商品、業態、施設、イベント、地域活性化、遊休地活性化などの企画プロデュースに携わり、米国フォーチュン誌でマーケティングの達人と評されるなど、その分析力と企画力には定評がある。また、企業、官公庁、公的団体、NPOに対する生活者視点を重視する市場創造型の変化に即応した実践的コンサルティングは数

多くの顧客から長きにわたり支持を得ている。

- UR都市機構つくばエクスプレス沿線地域PRスーパーバイザー、UR都市機構東雲街なみ街区企画委員、首都機能移転検討委員会専門委員、国土交通省ユーザーの視点に立った道路工事の改善マネジメント委員、日本道路公団IT時代における高速道路のあり方に関する検討委員、経済産業省Japan EXPO大賞審査員、経済産業省新エネルギー普及委員、愛知万博キャラクター審査委員、東京モーターショーオフィシャルリポーター、(財)日本ウエルネス協会評議員、(社)コンピュータエンターテインメントソフトウェア協会日本ゲーム



大賞アカデミー委員、読売広告大賞審査員、秋田県ストアデザインコンペティション審査委員長、茨城県つくば田園都市推進会議アドバイザー、柏ストリートブレイカーズ塾頭、日本橋21世紀イベント「日本橋フェスティナレンテ」スーパーバイザー、千代田区街づくり懇談会委員、渋谷区百軒店商店会音楽の見えるまちづくり構想策定委員会委員長、武蔵野市吉祥寺グランドデザイン委員、長野県スキー再興戦略会議メンバー、愛知県「武将のふるさと愛知」軍師、奈良県観光PR大賞審査委員長、平城遷都1300年記念事業協会評議員、京都商工会議所「京都・ビジネスモデル推進機構」アドバイザー、兵庫県広報アドバイザー、大分合同新聞社豊の国かぼす特命大使、鹿児島県本格焼酎マーケティング研究会座長、鹿児島県薩摩大使、内閣府沖縄県離島活性化「美（ちゅ）ら島ブランド委員会」委員等を歴任する。

- 経済産業省ヒューマンメディア委員、岐阜県ソフトピアジャパン「メディアプラザ」企画検討委員、神奈川県KSPマルチメディアデジタルコンテストCD-ROM部門審査委員長を務めるなど、マルチメディア施設のプロデュース、デジタルコンテンツの企画制作も手掛けている。
- 一橋大学、東京工業大学、早稲田大学、津田塾大学、甲南大学の非常勤講師、拓殖大学客員教授を務める。日本シミュレーション&ゲーミング学会理事、日本イベント学会発起人、日本カジノ学会理事、日本計画行政学会政策評価研究会メンバー。
- CNNでキャスターを務めた他、ビジネスや社会現象についてコメンテーターとして頻りにテレビに出演している。また、新聞雑誌、各誌に連載を持つ。
- アッシー、メッシー、ジモティ、コヤジなど流行語の造語でも知られている。

2. 対談内容

日本YEGとは

西川：日本YEGというのはどういう団体なのかというのを簡単に教えてください。

國枝：全国各地の商工会議所の下部組織として青年部というのが出来ました。それから地域の青年部同士が「せっかく近くに同じ組織があるのだからたまに交流しよう」というところから横の連携を持つようになってきて、その活動が膨らみ「ブロック大会」という形で、各地区大会に広がりました。そして日商（日本商工会議所）からの呼びかけもあり、全国各地に青年部がひろがり連合会という形になってきました。

現在は、全国で399単会が日本商工会議所青年部（日本YEG）の会員としてネットワーク化されています。

これからは地域間連携をさらに強く結び、より大きな力を持てるようにしたいと考えています。

西川：商工会議所青年部のメンバーは、商工会議所に属していますか？

國枝：はい、メンバーは会議所の会員です。青年部のOBだけでなく現役会員も商工会議所の議員をしている会議所もあります。

青年部については、会議所の定款の中に記載されている青年部とされていない青年部があります。

地域での活動方法も違いますし、会議所と一緒に活動して青年部もあれば逆に干渉されずに街づくりをしたいというメンバーがあつまり、任意団体のような形で活動しているところもあるようです。

会員の定年も若い所は35歳で、高いところでは55歳卒業の所もあります。同じ青年部でも親子ほど歳の差が開くこともあります。いろいろなかたちの組織で活動を行っていますが、地域の商工業の振興を図る商工会議所活動の一翼を担う若い経営者の集まりという位置づけは全国同じです。

地域の状況

西川：國枝さんが日本YEGの会長になられて、日本の地域はいかがですか？

國枝：地域と言われる場所の危機を感じます。日本でも「利益優先主義」のアメリカ的な市場経済になってきて、人間関係というのが段々難しくなり、コミュニティが崩壊してきていると感じています。

西川：コミュニティの崩壊、例えばどういう点を感じられますか？



國枝：もともと日本人は、向こう三軒両隣と互いに付き合ったり、時には助け合ったりの国民性があります。それは地域という運命共同体、同じ経済ベースの中で一緒に生活をしている関係があるからそういう意識って持っていました。災害があったときが一番端的な例だと思います。自分も被災者でありながら、よりつらい人のために立ち上がるグループが出来るというのが日本人です。すべてではありませんが海外ではすぐ暴動とか略奪が発生するのをニュースなどで見かけます。こういう日本人の素晴らしい国民性は昔から地域コミュニティを大切に

していたからだと思います。

しかし、昨今のいろんな事件を見ているとその大切な何かの崩壊を感じます。助け合うという国民性が薄れつつあります。いろいろな意味で地域社会の見直しが必要と感じています。

西川：日本の地域ごと特性が失われましたね。どこかの町へ行って写真を撮って「これはどこだと思いますか？」と言ってもどこか分からない。同じような建物が建っているし、ホテルに泊まっても全然地域性がない。どこのレストランに入っても中華とか、京風の和食がある。全然地域性がなくなりましたね。そういうことについてはどうお考えですか？

國枝：駅を降りた風景も再開発した地域はどこも同じですね、確かにきれいにはなったようですが。

西川：どこもミニ東京・プチ東京みたいですね、郊外型のショッピングセンターができて便利にはなるけれども地域性はどんどん薄れきました。

國枝：地元で見直したいですね。自分の町が何でできたのかというところをもう一回考え、歴史・史跡があって、自然があって、地域の引き出しを全部引っ張り出してその総合力で街づくりが必要です。あくまでも地域というものは地域にあるものを皆資産として考えてそれを有効に使っていかなければいけないのではないかと思います。

西川：本当に皆どこも同じ。観光客もミニ東京やプチ東京に行っても面白くないですよ。



國枝：個性も何もないですからね。きれいな施設はある。それだけならそこに行く魅力はないです。やっとそういうことに地域が気付きはじめています。それぞれの町がいい物を残そうとしています。とても大事なことで、本来あるべき方向に向かっていていると思っています。

西川：少しずつそういう方向にきていますね。日本の文化ということもどんどん失われています。例えば海外から見たときの日本の文化は「華道」、「茶道」、「着物」や「武道」ですが、これらは畳があってはじめて成り立つものです。ところが今はもう全国の多くの子供達は畳がない生活をしています。

畳に触れたことがない。畳というと時代劇の中で見るもの。今の子供は畳に触れたことがない、これでは外国人と同じですよ。よく「食育」とか「キレやすい子供

達」とか「学校教育」がとかいいますが、根本的に家庭環境が変わったことに問題があると言われてます。

國枝：実際にイス・テーブルの生活になると畳はなくなりましたね。座という習慣もなくなりました。

西川：正座なんか全然出来なければ、掘りごたつもなくなっている。本当に畳がないですね。しかし、最近の若い世代でも和室が良いという人もいます。徐々に日本文化に興味を持ち始めています。

國枝：和室というのは本当に靴も履いていないし、寝転がってリラックスできる空間でもあるし、日本人にとってはいい空間ですよ。

西川：YEGはいろんなお祭もやっていますよね。昔からある伝統的な祭りから夏の花火大会まで。

國枝：やはり住民サービスとしての祭りなどの事業に関わるというのは青年部の役割です。

帯広にも冬には氷祭というのがあって、そこで毎年店を出しています。住民に対してサービスというのはやっぱり大事なと思います。

西川：街づくりとしてイベントやお祭りは重要ですか？

國枝：それも一つです。ただイベントに集中してしまうと、他の団体との見分けがつかないことになります。イベント自体、町の活性化のためにやっているというのは、他の組織も同じです。

ただ、「商工会議所の青年部組織」としてどのような役割があるか勉強しています。商工会議所青年部として地域で活動しています。

地域のビジネス支援

西川：日本YEGとしてはどのような活動をされますか？

國枝：地域を活性化するためには、まず、それぞれの地域が、なぜそこに町ができたのか？町の歴史は？などをよく知って、地域の財産はなにかを理解し、そしてそれを伸ばすことが必要です。

日本YEGは、地域の問題に直接手をのばすのではなく、地域の活性化のためにいろんなネタを提供し各地の青年部でその情報を有効利用できるように活動しております。

具体的な取り組みとしては会員のビジネス支援として、ビジネスプランコンテストをしています。このコンテストは地域でいろんな発想を持っている人のビジネスプランをより現実的近づけていくための取り組みです。今年で第4回目です。過去の応募プランの中では実際に地域で商売が成長してきている事業もあります。

地域のビジネス支援として平成15年に当時に日本YEGで立ち上げたコミュニティビジネス協議会があります。コミュニティビジネスのあり方や立ち上げ方の指導を青年部の勉強会の時に講師として行っています。

西川：コミュニティビジネスというのは簡単に言うとうとういうことになりますか？

國枝：コミュニティビジネスも地域や行政の窓口でいろいろな解釈があるので難しいところがありますが、Y E Gが地域の資産を利用してビジネスを立ち上げ、地域の活性化につながっていくということが基本になっています。

帯広でいうと屋台村が今有名ですけど、これもコミュニティビジネスの成功例です。この屋台村というひとつのビジネスが成立すると全国からY E Gの仲間が視察にやってきて地元を持ち帰ったらすぐに取り組みをはじめています。全国で屋台村ができていますが青年部が立ち上げたところも多いです。

西川：帯広は有名になりましたね。

國枝：寒いから屋台が出来ないと思ったら逆です。普段から寒さと戦っていますのでどんなところでも暖をとることに慣れてしています。むしろ博多とか南の方の夜とちがって寒い北海道で暖かい屋台のなかでシャツ一枚になってビールを乾杯するのがいい。本州の方にはイメージにギャップがあるので観光地としても成功しています。

地域活動の支援「Y E G大賞」

國枝：ビジネス支援だけでなく、Y E G大賞という街づくりそのものを取り上げている活動もあります。

大きな街には大きな街づくりのイベントがあるけど、小さな町も小さな町なりの大事なイベントがある。そういう「街づくりデータベース」を構築し、全国のメンバーが情報を公開し、各自は自分の町の街づくりに生かしていけるようにしています。

また、データベースを構築するだけでなく、全国の「街づくり」を表彰しています。本来、活動の甲乙つけるのは好ましくありませんが、頑張っているところにはもっと頑張してほしいという意味で表彰しています。

去年の表彰は岡山Y E Gの「1,000人が出会うH e y ! S a y ! C a f e !」でした。これは、少子化対策として未婚者の出会える場を作ろうという事業です。民間事業でもお見合いパーティがありますが、商工会議所青年部が主催していることで、社会的な信用が違います。参加する人も厳密に審査して、不真面目な考えを持っている人は排除して真剣な人だけを集めて行いました。これは高い評価を受けて全国で広がっています。

福島の「吾妻の雪うさぎパン・おむすび・デザート商品化事業」は、福島の山で春先最後まで残る雪渓がウサギの形に残るところがあります。この雪ウサギをモチーフにした弁当を作ろうとコンテストを行いました。優勝作品をコンビニエンスストアのファミリーマートで商品化を検討しましたが、一食2,500円~3,000円ぐらいにな

り断念しましたが、その代わりに雪ウサギパンと雪ウサギおむすびを作り、ファミリーマートチェーンに乗って東北で販売したら驚異的な販売数となり、その後全国展開をしたという事業です。

西川：どんな味ですか？

國枝：ふかふかした、やっぱりモチモチした感じのパンです。この後、全国のコンビニエンス関係からうちでも何か出来ないかという問い合わせがいくつかありました。青年部がやることによって地域とマスコミを巻き込んだ結果、宣伝費をかけずに販売数が驚異的な数字だったので話題になりました。

「新発田城三階櫓・辰巳櫓復元完成記念城下町しばた全国雑煮合戦」は新潟の新発田で雑煮合戦を毎年行っています。全国の地域の雑煮を持ち寄って勝負しています。これも毎年盛り上がっています。

大津の「平成17年度商い体験事業」は子供向けの事業です。小学生を対象にビジネスを1ヶ月ぐらいの期間にわたって体験し実際に商売を体感してもらう事業です。

西川：過去にはどのようなものがありますか

國枝：大分市で二十数万人集める「府内戦紙（ふないぱちん）」があります。青森のねぶたのように紙で作った山車を作って市内を引き回すというものです。「ぱちん」とはメンコのことで、戦国武将の絵の描いたぱちんを立体化したような山車が市内を回ります。これは元々青年部の先輩方が少人数の所からこつこつ積み上げてきて今、十数年目にして大分を代表する夏祭りになっています。

たくさんのお客様も集まりますので経済波及効果もすごいです。

このY E G大賞は毎年行っています。今年で第6回になります。

國枝色

西川：國枝さんが会長になってから始めた事業ってありますか？

國枝：「商工会議所を知ろう運動」をしています。我々は商工会議所の青年部です。そのためにはまず商工会議所をよく知って分析し、そのことによって自分達の行動指針になる基礎の部分を掴もうという活動です。もう一つですが、中央官庁の若手官僚との連携を始めています。彼らは中央官庁として膨大なデータベースがあり、客観的なアイデアも持っている。たくさんネタを持っています。ただ、現場に手足を持っていません。逆にY E Gは現場でやっていますが、地域に限定されたアイデアになりがちで壁にぶつかることも多い。この両者が地域のために本気で議論し、いろいろなハードルを乗り越える術を探して、地域に新しい風を起す突破口になると期待しています。将来的にはこれが各地のブロックとか県

とかいうレベルでそういった場が出来、地域問題を行政側と商工会議所側と一緒に考えることを目指してネットワーク作りをしています。

西川：経済団体というと日本経団連や同友会がありますね。

國枝：組織の質が違っていると感じています。どちらかというと企業ベースの考え方で地域での街づくりに関するものに積極的に関わる団体ではないです。地域のためには真剣に取り組むのが日商であり商工会議所です。

西川：だから地域の中小企業の立場ですね。

國枝：中小企業のためだけでなく、街づくり、街の計画を立案していける団体だと思います。

地域の将来を考えるシンクタンク的な部会を商工会議所が開催していく。そこには行政や中央官庁を始め企業家や街の元気な住民、教育関係者など多くの責任ある人たちを集め、そこに若手経済人として青年部も加わり、一緒に地域の将来像を考えて行政に提案していく活動をすべきと思います。今はそれに向かっての基礎作りですね。

西川：市町村合併がこの数年で一気に進んで、大きな町は商工会議所があって小さい町は商工会がありますよね。同じように青年部があって、行政が合併して、商工会議所青年部と商工会青年部が同じまちに存在していますね。それぞれの地域で商工会議所青年部と商工会青年部と枠を超えて交流会とかやっているようなところもありますね。

國枝：そういう関係が発展していくべきですね、同じ地域でも、もともと中心が違います。それぞれの街で活性化に取り組んでいます。一体として一緒に考えることや活動するためには全体を網羅した将来計画が必要ですし、いろいろ議論や勉強が必要と考えています。

****金融****

西川：商工会議所に入ると、一般的には制度融資などの窓口というイメージがありますが、日本Y E Gのメンバーの中に資金繰りに苦しんでいる会社などありませんか？地方の中小企業になかなかお金が回ってこないとか、黒字倒産などもよく聞きますがいかがですか？

國枝：日本Y E Gでは、中小企業に対する金融の問題の勉強会をやっています。確かに中小企業に対する融資の問題もあります。日本Y E Gでは融資の仕方の問題に取り組んでいます。事業の中身を評価した融資をせずに、「連帯保証人がいるから低利で貸す」というような状況になっています。結果的にこれが不幸な事例を生み出している。事業内容を精査した上での融資が当たり前の世界になってほしい。

西川：本来の金融あるべき姿ですよ、事業を客観的に評価する。今は少しずつ銀行も変わってきました。担保

だけではなく営業の売り上げを担保にしたり、暖簾代を担保にしたり、いろんな融資の仕方が出てきていますね。

國枝：信用保証協会も大分変わってきましたね。

西川：そうですね。金融の世界も変わろうとしていますね。

****リーダーシップ****

西川：日本Y E Gのメンバーの方々は経営者、もしくは後継者、幹部だと思います。その方々は二世とか三世の方もいらっしゃると思いますが、後継者がいないから会社を売却するとか、M & Aが行われている。それから息子に継がせたい、しかし、息子に能力がないとか、継いだけれども潰してしまったということも多いと思います。経営者の資質の向上についての活動はされていますか？

國枝：僕も二代目ですが、二代目三代目というのは弱いと言われます。修羅場をくぐっていないとか、先代を見て動いているところがあります。たとえどんな小さな企業でも自分で創業された方は無条件で尊敬してしまいます。何も無いところから立ち上げるというのは相当な試練があり、大変なこともあるでしょう。そういう意味で二代目三代目は弱いところもあると思いますね。

西川：だからこそリーダーシップというか、経営者としての資質を磨くということもY E G活動のなかで重要なことですね。

國枝：そうですね。いろんなメンバーと経営についても街づくりについても議論をいたるところでしています。Y E G活動はいろいろなことを学ぶことが多いと思います。

西川：お互いに切磋琢磨していますね。

國枝：リーダーシップという部分は、自分なりの考えがあります。例えば日本Y E Gという組織でたまたま会長という職を引き受けることになりました。よく「リーダーシップがありますね」と言われますが全然違います。Y E Gで知り合った、自分とはまったく違う個性を持った多くの仲間と、いろんな議論を通じて地域のために一緒にやろうということで今の執行部があり、委員会も委員長が主体的に動かしています。会長という立場は最後に何かあったときに責任をとる人であって、具体的に何かを動かしているわけではなくて、動かしているのはそれぞれの責任者達です。むしろ何かあったときの切り捨てる尻尾の部分ですね。だからリーダーシップじゃなくて「リーダー尻尾(しっぽ)」です。自分の最初の思いを全員で共有して進んでいけば間違いないです。途中で方向が違えば議論し、調整して行く。ただ何かあったときの責任を取る、それは会社の経営者も同じだと思っています。

西川：そういう意味でリーダーシップという言葉よりも人を生かすということを学んでいますね。



****海外について****

西川：海外との連携をお聞かせください。

國枝：今年の鈴木相談役（平成15年度日本YEG会長）がC A C C Iのアジア商工会議所連合会に出向しています。

昨年の全国大会のときにフィリピンのアナ・マリー・ペリケさんが来られて、YEGという組織に非常に興味を持って、こういう組織をアジアでも起こしたいと若手起業家委員会というのを作られました。彼女が委員長で鈴木相談役が副委員長です。僕らとしてはアジアとの連携が、日本の地域ベースで動いている我々にメリットがあるか判断が出来ないので、調査してもらうという状態

です。「日本は何をしてくれるんだ」という考えがあるかもしれません。

西川：もともとアジアの組織や世界の組織とか交流ありましたか？

國枝：青年部では初めてです。海外との交流のメリットデメリットもこれから勉強です。全国では海外と取引されているメンバーもいますので、なにがしかのメリットがあるといいのですが。

****夢****

西川：國枝さんが考える日本の社会はこうなってほしいということがありますか？

國枝：そんなおこがましいことはありません。ただ、かつての日本の地域は、住民と企業と行政が互いに持ちつ持たれつ関係があり、いろんな意味で上手く動いていたと思います。そんな関係を取り戻したいです。安心して住民が暮らすことができる地域。共同体意識を持つすぐれた人材が育ちそこから新しい産業が芽吹く豊かな地域がたくさん出来ること、そういう基礎があって初めて日本は豊かな国になると思います。

西川：ありがとうございました。

編集後記



今年の広報委員会では、日本YEG広報委員会経験者のいないなかでスタートしたのが約1年前でした。全ての作業が手探りで迷いながらよれよれしながら、それでも一步一步進みなんとかゴールが見えてきました。全国に「新しい風」が伝わったでしょうか？私自身「我々は商工会議所の青年部である」という台詞を一年間聞いてきました。一年間たってやっと自覚することができました。気が付くのがちょっと遅かったかもしれませんが、残り少ないYEG活動につなげていきたいと思っています。最後になりますが、一年間、HP・メールマガジン・石垣等ご愛読いただきありがとうございました。こころより感謝いたします。

提言書	01	いしかわ加賀宣言・いしかわ加賀会議紹介	11
一年を振り返って	03	全国商工会青年部連合会会長 大高衛様対談	16
大分宣言・大分大会紹介	05	西川りゅうじん様対談	19